

朝日新聞の終末期医療に関わる記事を読んで

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



文芸誌「文学界」に掲載された「最後の1ヶ月間の延命治療はやめませんか」という対談が波紋を広げているという記事が、2019年2月11日朝日新聞 朝刊に掲載されていました。

「文学界」に掲載された対談内容については様々な批判記事が書かれているように、知識不足や未熟な点が否めないと私も思いましたが、私は医学や介護の専門誌ではなく「文芸誌」に、しかもこのような若手論客の終末期に関する対談記事が掲載されたということに驚きを感じました。対談の記事やその批判記事、そして今回私が読んだ朝日新聞の記事についてもそうですが、このように大きな紙面で扱われるくらい終末期医療への国民の関心が高まってきているということだと感じたからです。



私は以前より、日本の社会が抱えている問題として、平均寿命と健康寿命に差があり、この差が生み出す様々な問題を解決していかなければいけないと公言してきました。もちろんそのためには健康寿命を延ばすことが第一ですが、同時に日本の高い平均寿命がご本人にとって本当に幸せな寿命なのか？ということも考える必要があるということも常々考えています。

人生の最終段階にある患者さんに高度な医療を施すことは、時としてご本人の苦痛につながることもありますし、意識が戻らずに植物状態となってしまうこともあります。その場合、大きな心労と経済的負担がご家族にのしかかってくることもあるのです。患者さんの中には「どのような手段を使っても、どのような姿になっても生きていたい」と思う方、また「回復の見込みがないのであれば、穏やかに死を迎えたい」と思う方もいらっしゃると思いますが、私はどちらの意思も尊重すべきだと考えています。ここで重要なのは「本人の意思」なのです。

2018年の医師研修会では箕岡医院 院長 で日本臨床倫理学会 理事である箕岡真子先生に『「終末期医療の倫理」の基礎と「DNARの倫理」～アドバンスケアプランニングの重要性～』について講演を賜りましたが、その中でも「患者本人の意思が何よりも重要であり、また患者から指名された代理判断者（家族や親しい知人）が終末期医療について判断するような場面になっても、自らの利益ではなく“患者が望むであろうこと”に可能な限り近づけるように話し合っていくことが大切である。」ということをお話しになっていました。



健育会グループ 平成30年度 医師研修会

また健育会グループの副理事長 岩尾総一郎先生が理事を務められている日本尊厳死協会でも、「平穏死」「自然死」を望む方々が、自分の意思を元気なうちに記しておく「リビングウィル」を提唱されており、健育会グループでは病院・施設に入られる高齢の患者さん・ご利用者にできる限りご本人のリビングウィルを確認するように取り組んでいます。また終末期医療について様々な職種と考えるために専門家をお招きしご講演をいただくなど、研修を積極的に行っています。

私の思い描く健育会グループの理想の姿は、入院する患者さん・ご利用者ご本人から、そしてご家族から「健育会グループの病院で看取ってもらいたい」「健育会グループの主治医にお任せします」と言っていただけるような病院・施設になることです。なぜなら、それが究極の信頼関係が築けた証だと考えているからです。そのためには、患者さん・ご利用者、ご家族と日常の中で密にコミュニケーションをとり、人生の最終段階にある不安や苦痛に寄り添っていくことが大切です。そして、そのリーダーシップは医療チームのリーダーである医師がとるべきであると、私は考えています。

人間はいつか死を迎えます。その時をどのような時間にしたいのか、一人一人が考え選択する時代が来ています。健育会グループでは、患者さん・ご利用者がそれぞれのより良いその時を選択ができるよう、力を尽くしていきたいと考えています。